

## 留学生のためのアカデミック・ライティング教材の開発に関する研究

二通 信子<sup>(1)</sup>

佐藤 不二子<sup>(2)</sup>

### 1. はじめに

本稿は大学で学ぶ留学生のための文章表現指導の目的と内容を検討し、そのシラバスと指導の方法について提案するものである。留学生が大学での学習を進めていくためには、レポートや論文を書くための文章表現力の養成は特に重要な課題である。本稿では大学に入学する学生の実態を踏まえて指導内容を整理し検討する。なお、現在筆者らは本稿の内容に基づき留学生のための作文教科書を作成中であるが、その具体的な内容や実践結果の検討は別の機会に行うこととする。

日本語教育における従来の作文教科書は、いわゆる生活作文や感想文のような一般的な作文能力を目指したものが多かった。中には佐藤他(1986)のように「大学で要求される基礎的的作文力(構文力・構成力)」の習得を目的とする教科書もあるが、全体的な傾向として、文章作成のための文型や語彙の指導に重点が置かれていた。こうした現状から、今回の教材開発にあたっては、論理的な思考の能力の養成や、論の組み立て方法の指導も考慮に入れた教材を目指した。

標題の「アカデミック・ライティング」は英語教育で使われている用語である。Oshima, Hogue(1991)によれば、アカデミック・ライティングとは「大学で求められる文章」で、教師を読み手とし、フォーマルな文体で、説明・説得を目的とした文章を指すという(pp. 2-3)。筆者らは読み手を教師に限定せず、学問分野で使われる文章全体を指す語として用いることにしたい。

第二言語及び外国語としての英語教育においては、アカデミック・ライティングの習得のための教科書が数多く出版されている。こうした成果をもとに、日本でも、橋内(1995)、崎村(1998)、磯貝(1998)などの日本人学生対象の英語論文作成のための本が、また木下(1990)、山口(1988)など英語論文の書き方を取り入れた日本語論文の作成のための本が、それぞれ出されている。このようなアカデミック・ライティングの教科書が、従来の日本人のための論文作成の解説書と異なるのは、アカデミック・ライティングの目的や性格を明確に規定し、論理的な思考の組み立てや論理的な文章の構造を特に重視して指導しているという点にある。筆者らの今回の研究にあたっては、こうした英語教育における考え方や指導方法から大きな示唆を得ている。

本稿では、以下の第2章で大学に入学する留学生の文章の実態について述べ、第3章では英語教育におけるアカデミック・ライティング教科書の内容や指導法を検討する。そしてそれらを踏まえて、第4章では上に挙げた五つの指導項目について詳述し、最後に第5章で筆者らの作成した教科書のシラバスや指導内容を紹介する。

---

(1) 北海学園大学

(2) 札幌大学

## 2. 学生の実態

### 2.1 留学生の大学入学時の日本語能力と問題点

入学時の留学生の日本語能力は、学習期間、学習場所により差がある。特に、学習場所、つまり日本国内での学習か国外での学習かで、技能に違いがある。しかしながら、この差は主として日常生活上でのことであり、大学で学習するための日本語能力という点になると、国内、国外を問わず留学生は等しく困難を抱えていると言える。それは、大学の授業に特徴的な大教室での一方的な講義のような、語学学校にはない授業形態の違いも一要因である。しかし、それは日本人の新入生にも言えるであろう。主たる原因は、語学学校での授業が日本語学習者の理解度に合わせて行われたのに対し、大学でのそれは日本人学生の言語能力と背景知識のレベルに合わせて行われることにある。

国立大学の受験者に義務付けられる日本語能力テストの1級合格者であっても、大学での講義による授業内容を聴くだけで理解する能力は保証されているわけではない。予習復習の手掛かりになる教科書、要点の板書、理解度確認のための教師の質問などなしには、授業内容の理解は困難である。また、大学での教科書は、抽象的な語が多い上、大学教師は内容については説明することはあっても、日本語それ自体を説明することはないから、留学生には理解しにくい。さらに困難なのは、レポートを書くことである。これは入学後すぐに求められる課題であるが、感想文のような文章しか書いてきていない留学生には大きな問題である。入学後の日本語学習で1年間「文章表現」の指導を受けるものの、その授業を受けつつ他の科目で2000字、3000字のレポートを書いていかなければならないのである。

以上、留学生の入学時の日本語能力と大学での一般的な問題点について述べた。以下ではレポートの文章の問題点に絞って述べてみたい。

### 2.2 留学生のレポートの文章の問題点

留学生のレポートの問題点は大きく次の四つに分けることができる。

- ①表記および句読点や記号に関するもの
- ②文法・表現に関するもの
- ③思考の論理的な組み立て方や文章構造に関するもの
- ④文章の内容に関するもの

次にこの四つの内容をもう少し詳しく述べてみる。

まず、①では、漢字の問題がある。これについては学生の出身が漢字圏か非漢字圏かによる能力の差がある。また、漢字圏でも中国人学生と韓国人学生では誤り方が違う。中国の学生は自国の漢字を使用する誤りが多い。その他の表記の問題は、主として、清音・濁音、促音、長音などの不正確な発音により起こるものである。母語の影響はあるものの、個人差も大きい。句読点については、句点で終わるべきところを読点でつなげた文を書く誤りが中国人学生に見られる。その他、不規則な記号の使い方などが見られる。

②では、初級日本語学習で既習の助詞の誤りが最も多く、自動詞・他動詞、受動態の誤りなどがそれに続く。その他、主語と述語の不一致、いわゆる「ねじれた文」がある。これは比較的日本語能力のレベルが高い学生に見られる。また、話し言葉の表現と書き言葉の表現の混同がみら

れる。「です・ます体」と「である体」の混同もその一例である。

③では、根拠を示さずに意見・判断を述べる、段落分けをせずに長い文章を書く、内容のまとまりがない段落を作る、段落や文章の終りにまとめの言葉がない、などがある。

④では、何の資料も読まずに自分の感想だけを述べたもの、新聞や他の出版物の内容を写したものの、主題、つまり何を伝えたいかが不明確なもの、などである。

以上が特に目につく問題点の内容である。以下では、これらの問題点の中で特にアカデミック・ライティングに関わるものを取りあげて考察する。

### 2.3 問題点からの考察

①の句読点や記号については、日本語学校で教えられていないか、あるいは教えられても身につけていないことが考えられる。大学入学時の日本語学習の早い時期に、大学で求められるレポートの様式を考慮に入れて、統一的な指導をすることが必要であろう。

②の話し言葉の表現と書き言葉の表現の混同は、大学に入る前に書き言葉の指導や練習が十分にされていないことから起こるものであろう。また、「ねじれた文」の問題は、学生が「長い文を書くのが上達の証し」と思うことがその一因と考えられる。日本語能力の高い学生ほど、長い文を書こうとする。短く的確な文章を書く指導が必要である。自動詞、受動態などの問題は、日本語学校では「だれが何をした」という文章を書くことが多いのだが、大学での説明的文章では事柄に視点が置かれ、自動詞や受動態の使用が多くなる。そのため混乱が起こり、誤りが多く生じるのであろう。この視点の違いによる文章表現の違いも入学後早期の指導が必要である。文法に関して、学生の中には「自分が文章を書けないのは文法を知らないからだ、つまり文法を知りさえすれば、文章が書けるのだ」という認識を持っている者が少なくない。しかし、日本人学生が日本語の文法を知っているからといって、だれでも文章が書けるわけではない。あとで述べるように、レポートを初めとする論理的な文章を書くのに最も必要なのは「思考」であり、それを「いかに論理的に組み立てるか」である。まず、論理に組み立て方が必要である。この訓練の中で、今までに習ってきた文法事項・句型などが、どこでどのように使われるかを示し、確認させ、さらに、それに必要な新たな文法事項を加えた指導が必要であろう。

③と④は共に、「書く前に必要な思考過程」と「思考の論理的な組み立て方法」の訓練を受けていないことから起こると考えられる。Lawrence(1992)は、書く過程には次の四つの過程があり、それは、「準備段階(pre-writing)」「計画段階(planning)」「実際に書く段階(writing)」「推敲段階(revising)」であると述べている。

書き出す前には、与えられたテーマから話題を探し、絞っていく過程や、文章組み立てのプランを作る過程を経なければならない。このためにはブレイン・ストーミングなどの方法がある。しかし、この思考過程は、実際に「考える」「書き出す」「客観的に検討する」という行為を繰り返し体験しなければ身につかないし、その効果も実感できない。学生たちには授業で体験させる必要がある。また、アカデミック・ライティングと感想文との違い、アカデミック・ライティングに必要な思考の論理的な組み立て方も、解説だけでなく、種々の練習問題を通して理解させることが必要である。

さらに、自分で文章を書くだけでなく、種々の論理的・説明的文章を読んで、どのような論理関係が使われ、どのような文章構成になっているか、それらが内容を伝えるのに相応しいか、な

などを考察し検討することも必要である。出版物に書かれたものは全て正しいと思い、それを何も検討をせずに自分の文章に取り込む学生が少なくないからである。

以上、学生の問題点から得た考察とその解決のために取り上げたい方法を述べてみた。

### 3. 外国人のための英語教育におけるアカデミック・ライティングの指導内容

外国語としての英語教育の歴史は古く、その研究の歴史も長く裾野も広い。日本語教育では、英語教育の教授法から多くのことを学んできている。筆者らは、英語圏の大学で学ぶ外国人学生のためのアカデミック・ライティングの教科書から次の四冊を取り上げ、その指導内容をみた。

① STUDY SKILLS FOR ACADEMIC WRITING. John Trzeciak/S. E. Mackay. 1991

② WRITING AS A PERSONAL PRODUCT. Laura Donahue Latulippe. 1992

③ wRITING ACADEMIC ENGLISH. Alice Oshima/Ann Hogue. 1991

④ WRITING AS A THINKING PROCESS second edition. Mary S. Lawrence. 1996

これらの教科書は共に、留学生が英語圏の大学で課せられる小論文、学位論文が書けるように指導するという目標を持つが、指導項目の重点の置き方にはそれぞれ特徴がある。この章では、まず各教科書の特徴的な指導内容を述べ、次に全てにみられる共通点に触れ、最後にそれらについての考察を述べたい。なお、以下の教科書の内容を示す部分に“essay”という言葉が出てくるが、英語圏の大学ではこれは小論文のことを指す。

#### 3.1 各教科書の特徴的な指導内容

##### 3.1.1 STUDY SKILL FOR ACADEMIC WRITING

この本は5つのUNITから成り、各UNITで以下の内容を取り上げている。

UNIT 1: Surveying material

UNIT 4: Towards extended writing

UNIT 2: Note-taking and summarizing skills

UNIT 5: Writing the extended essay

UNIT 3: Writing skills

この本の特徴は二つある。一つはUNIT 1とUNIT 2の内容、つまり書く前の段階の「資料を収集する」までの技能の指導に全体の約半分の頁を割いていることである。もう一つは、タスクの題材に多数の実際の学術論文を使用し、それに関して学習項目確認の質問を設けていることである。

UNIT 1では、アカデミック・ライティングにはたくさんの資料を読むことが必要だということを前提に、自分に必要な資料を選ぶための技能を学習させる。ここでは、未知の本の内容や価値を読む前に知るために、本の「題」「目次」「索引」「カバーの推薦広告(blurb)」「最初と最後の段落」「序文」「奥付」などを手掛かりに本を考察する方法を教える。それらをイラストレーションで示し、その役割を解説した上で、本の内容についての手掛かりを掴む課題を多数用意している。

UNIT 2で取り上げている項目は、上記の技術によって集めた資料を後に参考にするために、ノートに取る、あるいは要約する技術の訓練である。文献や記事から必要な情報のノートを取る時、そのまま写すのではなく、重要部分を図式化したり、自分の言葉でカードに整理する方法などを勧めている。時間を節約し、剽窃を犯さないためでもあるが、それ以上に大事なのは自分の言葉に置き換えることによって真の理解ができることだと述べ、ノート取りや要約の多くの実例と課

題を提供している。

UNIT 3からUNIT 5までは、引用の仕方、パラグラフの書き方に始まり、文章の構成、論文のレイアウト、参考文献の記し方と続き、最後にアカデミック・ライティングで使用されるラテン語の省略記号を取り上げて終わる。論文の内容は何とか書くことができて、レイアウトや参考文献の記述の様式がわからない外国人の学習者にもわかりやすく示されている。

### 3.1.2 WRITING AS A PERSONAL PRODUCT

この本は8つのUNITから成り、内容は以下の通りである。

UNIT 1:What Shall I Write?

UNIT 2:For Whom Am Writing?

UNIT 3:Preparing a Writing Plan:Explaining with Examples

UNIT 4:Preparing a Writing Plan:Comparing and Contrasting

UNIT 5:Preparing a Writing Plan An Essay of Definition

UNIT 6:Preparing a Writing Plan Cause and Effect

UNIT 7:Preparing a Writing Plan:Persuading Your Audience

UNIT 8:Preparing for College Research Papers

著者、Laturippe は、UNIT 1の初めで次のように述べている。"To be a good writer, you have to enjoy thinking and writing about your topic" (p.2). そして楽しむようにするためには、自分自身が興味をかきたてられ、その興味を自分から広げていけるような話題を選ばなければならないと付け加えている。この本の特色は、この主張が全体を貫いていることと、pre-writing、つまり書く前の活動に力を入れていることである。この特色はUNIT 1とUNIT 2に最もよく現れている。

UNIT 1では、文章を書くために、自分の興味のある話題を見つける方法がいろいろ試みられる。自分を知るための質問をする、フリーライティング、日記をつける、新聞・雑誌の記事から探す、国会図書館の項目リストを見る、などである。フリーライティングというのは、心にあることを何でも、文法や表記を気にすることなくそのまま文字にして書いていくことである。この目的は、考えを文字にすることであり、考えを刺激することであって、だれかに読ませることではない (p.9)。話題を見つけたら、次は話題の焦点を特定のものに絞っていく。ここでも、まず自分の体験にひきつけ、それについての様々な問いを書き出し、その答えを書き留めていく方法が勧められている。

UNIT 8では、資料を用いた論文の準備段階の指導をする。ここで著者は論文を書くことで最も難しいのは「主題選び」、「資料集め」、そして「資料の整理」であると述べ、「主題選び」について、再び次のように言う。「指導教官からテーマが示唆されている場合でも、その中で自分が特に興味を抱く方面に焦点を絞っていくことがとても大切である」(p.199)。そのための具体的な指標として、次の四つのことが必要であると述べている。その主題に関して、

- ①非常に興味を持っていること
- ②答えを得たいと思う質問を持っていること
- ③調べる必要を感じていること

④調べた結果、何か自分ができることがある、またはしたいことがあること  
そして、大きい主題から更に特定の主題に絞っていくために、UNIT 1より更に多面的な質問づくりの例が示され、練習が与えられている。

### 3.1.3 WRITING ACADEMIC ENGLISH.

この本は4つの部分から成り、以下の内容を含む。

PART 1 Writing a Paragraph                      PART 3 Using Outside References  
PART 2 Writing an Essay                         PART 4 Sentence Structure

著者はこの本の初めで「良い文章というのは、正しい文法で書かれ、考えが論理的に正しく組み立てられた文章である」と述べている(p. )。この本は、PART 1と2で論理的な思考方法を用いた文章の書き方、PART 3で参考文献の使い方、そして、PART 4でアカデミック・ライティングに必要な文法を指導する。

この本の一つの特色は、パラグラフを文章の内容のまとまりの基本的な単位として重視し、この指導に全体の30%の頁を費やしていることである。一つのパラグラフの構造を説明した上で、内容の構成におよび、全体のまとまり(unity)や首尾一貫性(coherence)を持たせるのに必要な言葉・表現、論理的な思考方法の種類、主題を支える具体的な根拠などを示し、練習問題を与えて指導している。英語のアカデミック・ライティングでは、パラグラフの構造は次のように決まっている。

- ①序の部分(Introduction) …この部分に主題文(Topic Sentence)が含まれる。
- ②主題を支える部分(Supporting Sentences)
- ③まとめの部分(Conclusion)

この構造は、論文全体の構造と同じである。この本は、文章の出発点を良いパラグラフの書き方の習得においている。

この本のもう一つの特色は、文法の指導にも重点を置いていることである。この部分には全体の約40%の頁を割いている。ここでは、アカデミック・ライティングに使われる文の種類や構造を説明し、練習問題を与えて指導している。大きく分けると、次の三つの項目になる。

- ・文の種類(単文、重文、複文、混合文)
- ・種々の複文(名詞節、副詞節、関係詞節)
- ・文詞構文と動名詞

指導の内容は、新しい文法事項を教えることではなく、アカデミック・ライティングという目的のために学生自身に既習の文法知識を見直させ、その効果的な使い方を教えることである。例えば、文の種類の部分では、ある一つの事柄について、重文のみを使った文章例と複文のみを使った文章例を読ませ、読者が受ける印象を考えさせた後に、重文、複文の文の持つ役割、効果を説明し、実際に書かせる。

この本全体を通じて、学生に読ませ、質問を与えて考えさせた上で、説明し、実際に書かせていく方式がとられている。

### 3.1.4 WRITING AS A THINKING PROCESS.

この本は、初めに全体を通じて必要な説明的練習がある。第1章から第9章まではアカデミック・ライティングに必要な論理的な思考の組み立て方法(Methods of Logical Organization)の一つ一つを各章で取り上げ、残りの章で「意見」「提言」のような主張の仕方を取り上げている。

Explanatory Exercises (説明的練習)

CHAP.1 Chronological And Spatial Order (時間的・空間的順序)

CHAP.2 Classification (分類)

CHAP.3 Synthesis (統合)

CHAP.4 Comparison And Contrast (比較・対照)

CHAP.5 Cause And Effect (因果関係)

CHAP.6 Prediction (予測)

CHAP.7 Hypothesis (仮説)

CHAP.8 Synthesis (統合)

CHAP.9 Generalization And Substantiation (一般化と実証)

CHAP.10 Personal Opinion (意見)

CHAP.11 Proposal (提言)

CHAP.12 Synthesis (統合)

この本も、目指すものは上記の3冊と同じように、学生が大学で書かなければならない文章を書けるように指導することであるが、異なる点は、書くための論理的な思考の過程をいかにして意識させるかということに重点が置かれていることである。この本にはパラグラフやアウトラインの作成の仕方などの指導はない。著者はこの本の初めで“writing is an active thinking process”であるから、学生はこの本の全ての練習問題に知的能力を精一杯使って取り組んでほしいと述べている (p.1)。

この本の特徴は、Explanatory Exercises の練習に見られる。この部分は、論理的な思考の組み立て方法を示す語彙 (Methods of Logical Organization)、例えば、時間的順序、分類などの語彙を認識させることから始まる。ここでは三つの練習問題例を紹介する。なお、これは問題そのままではなく内容のみを簡単に紹介するものである。

#### ①論理的な思考の組み立て方法を示す語彙を取り出す練習

以下の語句を<Subject Matters ><Methods of Logical Organization>の二つのグループに分ける。辞書を見てもよい。

air pollution	comparison	biology	cause and effect
prediction	classification	economics	American history
nutrition	computers	hypothesis	contrast

この論理的組み立ての語彙を認識させる問題はこれに止まらず、形式を変えていくつも登場する (pp. 3-13)。

## ②推論 (Inference)の練習

ある事柄について述べた文章を読み、内容から推論した文をいくつか見て、正しいか誤りか (True or False) 答える。その後で、推論の根拠の確実性、不確実性を考え、以下のような目盛りの上に書き込む。その後、不確実性、確実性の分かれ目が何に因るのかを考える (p. 25)。

necessary	probably	possibly	insufficient	possibly	probably	necessary
false	false	false	data	true	true	true
必ず誤り	多分誤り	誤りかも しれない	不十分な データ	正しい かもしれない	多分真実	必ず真実

## ③「事実」と「意見」を区別する練習

ある事柄について書かれた文章から事実と意見を取り出した後、挙げられた名詞について「事実」と「意見」の文を書く (p. 27)。

この本のもう一つの特徴は、練習に使われる文章に「農業」「伝記」「移民」「コミュニケーション」「犯罪」等々の24の分野の今日的な話題が取り上げられ、その話題が1回かぎりではなく、何回も違う項目で登場することである。これについて著者はそれぞれの分野の特徴的な語彙に慣れさせることが目的であると説明している (p. 1)。

## 3.2 上記のテキストの指導内容における共通点

上で見てきたように、この4冊はそれぞれ指導の重点に違いが見られる。しかしまた、共通する指導内容がある。ここでは共通点について述べてみたい。

まず4冊に共通することは二つある。一つは論文を書く前の準備段階、「資料探し」や「話題探し」「話題しぼり」の指導に多くの頁を割いていることである。もう一つは、各指導項目に用意された練習問題の量の多さである。日本語教育の類似の教科書では、一つのタスクの質問はせいぜい4～6問である。また、筆者らが試作した『留学生のためのレポートの文章』でも、課題を入れて5問程度であるのに対して、上記の教科書では大きな問題が8～12ぐらいあり、大きな問題の中にさらに小さな質問があることもあり、非常に多いという感じを受ける。

次に、初めに挙げた3冊の共通点をみると、以下のことが挙げられる。

- ・英語でのアカデミック・ライティングには「時間的順序」「分類」「比較・対照」「因果関係」などの論理的な思考の組み立て方法を使用すること
- ・書く前の準備段階で「話題探し」「話題しぼり」のために必要なブレインストーミングをすること。そのとき、考えは必ず書き出すこと。
- ・誰にむかって、何のために書くのか、読み手 (audience) と (purpose) を設定すること。
- ・書く前にアウトラインを書くこと。
- ・文章の構造で内容のまとまりの最小の単位がパラグラフであり、その構造は三つの部分からなる (3.1.3 参照) と教えること。パラグラフの最初に (時には最後に)、要旨を一つの文

にまとめた中心文をおくこと。中心文に続いて要旨の展開部があり、最後にはまとめがくること。

- ・文章全体の構成も①序論(Introduction)②本論(Body)③結論(Conclusion)の三つから成るとすること。そして、その序論に文章の主題文(Thesis Statement)を明記すること。

以上が力点こそ違え、3冊の教科書が共通に取り上げている指導項目である。次節で、これまで見てきた事から考察されることについて述べたい。

### 3.3 上記の英語教科書の知見からの考察

前節で見た共通点でまずわかることは、英語圏でのアカデミック・ライティングのレトリックが確立していることである。そして、教科書の指導が事実を示して具体的なことである。文章の基本的な単位のパラグラフについて、その構造、展開方法などをパラグラフ内の一つ一つの文の役割まで示して教える。学生は、教科書の指示に従って行けば、ともかくも英語のレトリックにあった形式でパラグラフを書けることになっている。規則が決まっていて、それが具体的な事実に沿って説明されれば分かりやすいのである。日本の場合は、その形式が確立していないため、指導法も一様ではない。「論文の書き方」についての本は多数出版されているが、感覚的な表現や抽象的な言葉による説明が多く、英語の教科書のように重要部分を事実で押さえた説明や指導がされているものが少ない。

次に、パラグラフに限らず、具体的、実地的な指導が必要だということである。それは、書く前の準備段階でのブレインストーミングをやってみるとわかる。実際に考えを取り出し、書き出す行為をすることで次の考えが生まれてくるのがわかるのであって、これを単に言葉で説明しただけでは会得、体得できないのである。

また、この「体得させる」が英語の教科書の練習問題の多さの理由になると思われる。筆者らは、これらの問題のいくつかを学習者として実際に取り組んでみて、その多さに辟易する一方で、問題をやっているうちに、考えのまとめかたに慣れることに気がついた。このようにたくさんの練習問題をさせるということは、テキスト作りの根底に「考え、書く技能は、言葉で説明しただけでは身につかない。繰り返しの練習・タスクによって初めて体得するものだ」という想定があるのではないだろうか。

さらに、取り組んでみて評価できたことは、各教科書のモデル文や練習問題の読み物が興味をひく内容であったことだ。そのため、自分から進んで読んでいくことができた。これは教科書の読み物として大切なことであろう。

これらの教科書から学ぶことは、「異なる言語、異なる文化を持つ学生にアカデミック・ライティングの指導をするときには、指導の目的に合い、しかも興味ある内容のモデル文を読ませ、書くための具体的、実地的な指示を与え、多くの練習をさせて、慣れさせることが大切である」ということである。本章で得られた知見をもとに、次章では日本の大学における留学生へのアカデミック・ライティング指導の目標とその指導内容について具体的に考えていきたい。

## 4. 留学生へのアカデミック・ライティング指導の目標と内容

### 4.1 留学生が目指すべき「論理的な文章」とは

留学生への指導内容を考える前に、「論理的な文章」という言葉の意味を整理しておきたい。筆者らは、アカデミック・ライティングの指導で目指す「論理的な文章」とは、「意見や考察が、直感や思い付きではなく、分析、総合、比較などの思考の過程を経たうえで、かつ内容面での一貫性と形式面での統一性のある文章で書かれているもの」であると考えた。

そして第2章以下のこれまでの考察をもとに、筆者らは留学生のアカデミック・ライティング指導で目標とすべき文章とは、次の四つの要件を満たすものであると考えた。

- ① 正確で客観的な文で書かれていること
  - ② 事実、自分の意見、他人の意見や文献からの引用、の三つが明確に区別されていること
  - ③ 分析、総合、比較などの思考過程を経たうえで、首尾一貫した内容で書かれていること
  - ④ 段落内、及び文章全体が論の組み立てを明確に示すような構造になっていること
- 次節では、このような「論理的な文章」を目指す指導の内容や方法について検討したい。

### 4.3 アカデミック・ライティングの指導内容

前節であげた目標を実現するために、留学生に対するアカデミック・ライティングの指導内容として、「アカデミック・ライティングに必要な基礎的な知識・技術」、「考えをまとめていく過程」、「論理的な思考の組み立て方」、「文章構造の意識化」、「文章に対する評価・推敲能力の養成」の五つを挙げ、以下それぞれについて説明、検討を行なっていきたい。

#### 4.3.1 アカデミック・ライティングに必要な基礎的な知識、技術

##### 1) アカデミック・ライティングに使われる文体、表現

「である体」で文章が書けるようにする。それに伴って、話し言葉の表現とアカデミック・ライティングで使われる表現との使い分けを理解させる。

##### 2) 正確で明快な文の書き方

説明的な文章に多用される文型や表現の中から、特に留学生の作文に間違いが多いものを取り上げ指導する。例えば長い文における主語と述語の対応、ことがらを主題にした場合の受身文や自動詞文、語や文の名詞化などを取り上げる。これらの学習を通して、内容が正確に伝わることを第一に考えること、読み手の立場に立った明快な文を書くことを指導する。

##### 3) 句読点、各種の記号の使用法

句読点、各種の記号、原稿用紙の使い方などの基本的な知識を確認する。

##### 4) 引用の方法、参考文献の示し方

自分の意見と外からの引用とを明確に区別することを教え、引用の示し方を指導する。また、文献情報の見方、参考文献の記載のしかたを指導する。作文課題において、参考文献を使った場合には必ずその旨を記載するようにさせる。

#### 4.3.2 考えをまとめていく過程

##### 1) 話題の絞り込みから主題の決定まで

レポート作成でもっとも難しいのは、漠然とした考えを整理し話題を絞り込んで、実際にレポ

ートの主題を決めるまでの過程である。教員からレポートのテーマを与えられた場合でも、その中でさらにどんな話題を取り上げるか、書く前に十分絞り込む必要がある (Laturippe:1992)。そのために、ブレイン・ストーミングやマッピングのような話題の絞り込みの方法を示し、自分に合った方法で話題を絞らせ、最終的にレポートの主題を決めさせる。また主題については、磯貝(1998)も指摘しているように、「○○について」という漠然とした形ではなく、「○○は～である」というように、自分の立場、判断を示し、論証の目的や方向性を明確にして書くことを指導する (p. 46)。それによりアウトラインの作成も容易になる。

#### 2)アウトラインの作成

レポートを書く前に、主題を支えるポイントはいくつあるか、説得力をもたせるためにどのような根拠を挙げるのか、などを十分検討する必要がある。入部(1998)は日本人留学生の書く英語のレポートには「振り子のような行きつ戻りつの思考過程」をそのまま文章にしたものが多いと指摘し、そうした思考過程は「書く前の自己内対話として」なされるべきものであると批判している (p. 15)。これは日本で学ぶ留学生のレポートにも共通する問題である。事前にアウトラインを書く場合でも、論の展開を十分検討したうえで項目を立てるように指導する。また書く過程で新たな考えが生じた場合には、主題に照らして取捨選択を行い、必要ならばアウトラインを修正するように指導する。

#### 3)論理を裏付けるための資料の活用

アカデミック・ライティングにおいては資料の活用も指導項目の一つである。資料の活用の意義や方法を学ぶために、モデル文(読解文)の学習の際にも、論述の根拠として資料がどのように使われているかに注目させる。また、提示された資料を使って論じるような作文課題を与える。さらに、レポート作成に役立つ統計資料の入手方法や各種の事典の紹介なども行なう。

### **4.3.3 論理的な思考の組み立て方**

#### 1)語の意味の明確化

論理的な文章を書くためには、それぞれの語の意味を明確にしたうえで用いなければならない。また特殊な語や高度に専門的な用語については定義を行なったうえで使用する必要がある。これらのことを理解させ、実際に定義をする練習を行う。

#### 2)論理的な思考の組み立て方、論理的な関係を示す文型や表現

論文の主題や目的によって、どのような論理の組み立てが用いられるのか、どのように論が展開されるのか、を理解させる。例えば分類、比較、因果関係などの項目ごとに該当する文章を提示し、論の展開のしかたやそれぞれの論理展開に必要な文型や表現を習得させる。そのようにして、学生が実際にレポートを書く場合に、その目的や手持ちの資料からどのような論理の組み立てが可能なのかを自分で判断できるようにする。さらに論理を組み立てる際のストラテジー(例えば比較の場合の、比較する対象の選び方や比較の観点)を指導する。

### **4.3.4 文章構造の意識化**

#### 1)段落内の構造の意識化

論理的な文章では、一つの段落には一つの内容だけを書き、それぞれの段落の内容が読み手に明確に伝わるようにしなければならない。段落を書くときには、その段落で何が言いたいのかを一文で述べる文（以下「中心文」）をまず考えるようにさせる。中心文を定めることによって段落の内容が整理でき、論の展開の方向を明確にすることができる。

また、中心文はできるだけ段落の始めに書くように指導する。それによって、書き手にとって段落の内容がまとまりやすくなると同時に、読み手にとっても論理の組立てが理解しやすくなる。日本人の一般的な文章では、中心文と言えるものがなかったり、あっても段落の終りに来る場合が多い。これは、日本語の文の構造や日本人のコミュニケーションスタイルに関係している。日本人は一般に、あることがらについて述べる場合、その前提や根拠を先に述べ読み手を納得させながら結論へ導くという書き方をする。一方、英語のアカデミック・ライティングでは段落の最初に中心文を書くのが一般的である。木下(1990)もその方式を推奨し、報告・説明・論述などの文章では「重点先行で書く」ことが「情報化時代の要請である」と述べている(p.119)。筆者らもアカデミック・ライティングにおいては、読み手に自分の考えを明確に、効率的に伝えるために、中心文を可能な限り段落の先頭に書くように指導したい。

さらに、段落内の各文の役割にも注意させる。段落には中心文以外に、中心文を支える文（以下「支持文」）、文章の展開を予告したり説明したりする文（以下「関係指示文」）、段落の最後に内容をまとめる文（以下「まとめ文」）などがある。一つの段落を組立てるときに、中心文の根拠となる支持文は適切かつ十分であるか、関係指示文やまとめ文は必要であるか、など読み手の立場に立って確かめながら書くことが重要である。段落の書き方の学習のなかで、段落内の各文の役割や配置に注意するように指導したい。

## 2)文章全体の構造の意識化

論理的な文章においては、段落内の各文とともに段落相互も論理的に繋がっていないといけない。文章全体の構造や、段落相互の関係を常に意識しながら書くようにさせる。

そのために、モデル文の読解にあたって段落構成を意識させる。また作文課題については、たとえ2～3段落程度の短い文章であっても、段落相互の関係を考えたうえで書くようにさせる。段落分けに慣れていない学生のために、初めは教師が段落の数や内容を指定して書かせることも必要であろう。そして次第に学生自身が段落分けやそれぞれの段落の役割を考えながら文章全体を構成できるようにしていく。

### 4.3.5 文章に対する評価・推敲能力の養成

自分の書いた文章に対し、自分で推敲できるようになることをめざす。そのためには、毎回の作文課題の目的（評価項目）を絞り、事前に提示して意識化させる。また、毎回の学習項目がそのとき限りで終わらないように、重要な点については繰り返し評価項目に挙げる。さらに、評価項目の一覧表を参照しながら自分で自分の作文が点検できるようにさせる。このような学習を通して、自分の文章に対する評価・推敲能力を養うようにさせる。

本節で述べた論理的な文章の学習は、批判的な読みの力をつけることにも繋がる。例えば、論の展開や文章構造を意識しながら書くことで、他人の文章の論の展開や文章構造を客観的に見る目が養われる。こうした批判的な読みの力は、大学での学習に広く求められるものである。

以上、本節ではアカデミック・ライティングの五つの学習項目について説明した。次章ではそのための教材について紹介する。

## 5. 『留学生のためのレポートの文章』の概要

### 5.1 教科書の目的と指導内容

この教科書は、留学生のためのアカデミック・ライティング能力の養成を目的とする。すなわち、4.1 で挙げたような論理的な文章を、日本語で書けるようになることを目指している。教科書の内容としては、4.2 で挙げた5項目のうち、「アカデミック・ライティングに必要な基礎的な知識・技術」「考えをまとめていく過程」「内容を論理的に組み立てる方法」、「文章構造の意識化」の4項目を中心に取り上げる。

### 5.2 対象者、必要時間数

対象者としては、大学入学直後の留学生で日本語能力が中級後半以上の者を想定している。必要時間数は1コマ90分として26コマ程度、一般の大学の週1回の授業で1年間で終了できる。

### 5.3 全体の構成

教科書は第I部、第II部の2つの部で構成される。第I部では文章表現に必要な基礎的な知識や技術を習得する。第II部の2～9課では、それぞれの論理の組み立て方法に応じた文章の書き方を学ぶ。また第II部の10～11課では、章立てのされた文章（レポート）の書き方を学ぶ。全体の構成は次頁の通りである。

<p><b>第1部 文章表現演習の前に</b></p> <p>第1課 レポートに使われる文体</p> <p>第2課 文の基本</p> <p>1. 自動詞・他動詞の使い分け</p> <p>2. 助詞の「は」と「が」の使い分け</p> <p>3. 主語と述語の対応</p> <p>4. 語や文の名詞化</p> <p>第3課 句読点の打ち方</p> <p>第4課 各種の記号の使い方</p> <p>第5課 引用のしかた</p>	<p><b>第2部 大学生のための文章表現</b></p> <p>第1課 段落の書き方</p> <p>第2課 仕組み・状態の説明</p> <p>第3課 歴史的な経過の説明</p> <p>第4課 分類</p> <p>第5課 定義</p> <p>第6課 要約</p> <p>第7課 比較・対照</p> <p>第8課 因果関係</p> <p>第9課 図表の利用</p> <p>第10課 論述</p> <p>第11課 レポートの構成</p>
--	--

### 5.4 課の構成

第Ⅰ部では、学習項目の提示・説明の後、練習を行なう。第Ⅱ部では、読解文の学習を通して、論の展開のしかたや論理関係を表す文型・表現を学び、各課ごとの目的に合う課題作文を書く。第Ⅱ部の課の学習の進め方は以下の通りである。

学習の順序	学 習 内 容
1) 課の目標 2) 読解文 ・読む前に ・漢字と語句 ・文章を読む  ・理解問題  3) 文型・表現 4) 作文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課の目標及び学習内容を確認する。</li> <li>・読解文のテーマや背景知識について確認する。 何に注目して読むか、読みの視点を定める。</li> <li>・本文中の難語句の読みや意味を理解する。</li> <li>・課の目的に応じた読解文を読み、論理的な文章の書き方を学ぶ。  <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <span style="font-size: 2em;">[</span> <span style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;">論理の組立て、段落相互の関係及び段落内の構造、</span> <span style="font-size: 2em;">]</span> </div>           論理関係を表す文型や表現、資料や文献の引用方法など         </li> <li>・読解文についての理解を確かめる。</li> <li>・段落相互の関係を把握する。</li> <li>・論理関係を表す文型や表現を習得する。</li> <li>・課の目的に応じて課題作文を書く。 作文を書く前に評価票により課の学習事項を確認する。</li> </ul>

### 5.5 読解教材の役割、及び読解文の選択・作成の基準

教科書の第2部では、それぞれの課に読解文を配置している。それらの読解文は以下のような役割を持つ。

- ①文章のモデルを示す（文体、論理の組立て、段落相互の関係及び段落内の構造、論理関係を表す文型や表現、資料や文献の引用方法など）
- ②大学生に必要な社会的な知識を与える
- ③課題作文のための資料の提供、課題作文への動機付けを行う

読解文は以下のような基準で選択した。なお、一部は筆者らが書き下ろしたものを使用した。

- ①大学生として必要な背景的な知識を与えうるもの
- ②学生の興味に合い、かつ専門的すぎないもの
- ③文章のモデルとしても適切なもの

文章表現の授業では、モデルとして提示する読解文の理解に長い時間を割くことはできない。したがって、理解問題は、読解文の理解を助け内容を確認するようなものにした。また、文章の構造について問う問題を必ず加え、文章の構造への意識化をはかった。

## 5.6 作文課題

5.

### 5.6.1 各課における作文課題

教科書の第Ⅱ部では、それぞれの課の目的に応じて短い課題作文を書く。課題を出す前に評価票で課の学習項目を確認し、課題作文の目的を意識させる。学生が課題に取り組みやすくするため、次のような配慮をした。

- ①課題の長さを原稿用紙1～1枚半程度と短くし、段落の数や構成について事前に指示する。
- ②テーマを限定する、資料を提示する、など準備段階での負担を減らし書くことに集中させる。

### 5.6.2 最終レポート

第2部の後半では、学生の興味のある話題で、原稿用紙5枚程度のレポートを作成する。話題の絞り込み、主題の決定、アウトラインの作成などを、教科書の各課の学習と並行させて行う。この最終レポートについても、予め評価票を提示し、目的を意識させて取り組ませるようにした。このレポート課題の目的は以下の通りである。

- ①話題を絞り込んでレポートの主題を明確にする過程を学ぶ
- ②資料の利用、引用の扱いに慣れる
- ③一つのまとまったレポートの全体の構成のしかたを学ぶ。

## 6 おわりに

今回の研究では、教材開発の過程で、留学生のためのアカデミック・ライティングのシラバスや指導方法について貴重な知見を得ることができた。しかし今回作成した教科書が、第4章で述べたようなアカデミック・ライティング能力の養成に真に有効なものであるのか、さらにどのような改善が必要なのか、詳しい検討が必要である。これについては筆者らの次回の課題としたい。

筆者らが本研究に取り組むのと前後して、大学での日本人学生を対象とした文章表現教育の必要性が主張されるようになってきた<sup>(3)</sup>。本研究中も複数の大学教員と日本人学生への指導に関して意見交換を行う機会を持つことができた。大学進学率が5割に近付いている日本の現状から、留学生のみならず日本人学生にも、大学での学習に必要な文章表現力の指導が必要となるであろう。筆者らが行ったアカデミック・ライティングの教材開発の試みは、その点でも意義があると思われる。

なお、本研究には1996～97年度文部省科学研究費補助金基盤研究C「留学生のアカデミック・ライティングに関する教材の開発」（研究代表者：二通信子、課題番号08680321）の一部を使用した。

---

(3) 二通(1996)の大学教員を対象にしたアンケート調査によれば、学生のレポートに対する評価基準として回答の多かったのは、「文章の構成」「テーマや記述内容についての正確な理解・把握」「飛躍のない論理展開、事実と意見の区別」「正しい日本語」など、論理的な文章の書き方に関するものである。また、自由記述の部分でも、レポートの書き方をはじめとする基礎的な文章作成の訓練の必要性が多く教員から指摘されている(pp. 69-73)。

## 参 考 文 献

- A. Oshima, A. Hogue (1991) "Writing Academic English" Addison-Wesley Publishing Company
- A. Hogue (1996) "First Step in Academic Writing" Longman
- J. Trzeciak, S. E. Mackay (1994) "Study skills for Academic Writing" Prentice Hall
- Joy M. Reid (1988) "The Process of Composition" Prentice-Hall
- Laura Donahue Latulippe (1992) "Writing as a Personal Product" Prentice Hall
- Mary S. Lawrence (1996) "Writing as a Thinking Process" the University of Michigan
- R. R. Jordan (1992) "Academic Writing Course" Nelson
- Senko k. Maynard (1998) "Principles of Japanese discourse" Cambridge University press
- 磯貝友子 (1998) 『アカデミック・ライティング入門－英語論文作成法－』慶応義塾大学出版会・
- 井上尚美 (1998) 『思考力育成への方略－メタ認知・自己学習・言語論理』明治図書
- 入部明子 (1998) 「国際化時代に通用する論理的な文章の書き方」『日本語学』17巻3号
- 大西通雄 (1998) 「論理的な表現力と国語教育」『日本語学』17巻3号
- 樺島忠男 (1983) 「文章構造」『朝倉日本語新講座5 運用I』朝倉書店
- 木下是雄 (1990) 『レポートの組み立て方』築摩書房
- 崎村耕二 (1998) 『英語で論理的に表現する』創元社
- 佐藤, 田中, 戸村, 池上 (1994) 『表現テーマ別 にほんご作文の方法』第三書房
- 高橋昭男 (1997) 『仕事文の書き方』岩波新書
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 二通信子 (1996) 「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『北海学園大学学園論集』  
第86・87号
- 二通信子・佐藤不二子 (1999 予定) 『留学生のためのレポートの文章』MEK出版局
- 野矢茂樹 (1997) 『論理トレーニング』産業図書株式会社
- 橋内武 (1995) 『パラグラフ・ライティング入門』研究社出版
- 浜田麻里、他 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 山口喬 (1988) 『エンジニアの文章読本』培風館